様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４１２７

研究課題名（和文）キャリア教育における多重多層型心理サポートプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of multi-layered psychology support program for career education

研究代表者
大石　英史（Oishi, Eiji）

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：８０２２３７１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：大学教育は，一般的な社会人基礎力の保証，個別化する学生の特性への対応，また特に地方大学においては，地域に還元できる人材の育成が求められている。本研究課題ではこうしたニーズに対応するキャリアプログラムをテーマに，大学生に対する包括的なサポートプログラムを開発することが目的である。具体的には心理アセスメントツールと実践プログラムの開発という2方向からアプローチし，心理尺度や援助技法を発展させた。

研究成果の概要（英文）：It is required for university education to guarantee the basic worker's skills and to answer the needs of each students.
In addition, at regional universities of Japan, it is required too to train of human resources who can do a service for the region. Our theme is building up the carrier program for these various needs with the point of view from recipient/student side, so the purpose of this study is to develop a comprehensive support program for university students. Specifically, we approached from a psychological assessment tool and development of a practical program, and developed psychological measures and assistance techniques.

研究分野：臨床心理学

キーワード：包括的サポート　大学生適応感　社会人基礎力　キャリア教育　地方大学モデル

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで，主に中高生の学校不適応に臨床的立場からケースを扱うとともに，個別の支援だけでなく学校全体での支援プログラムを実践してきた。申請者が研究代表者となった「効果的介入を目的とした不登校問題への包括的アプローチ」（研究課題番号：22530706）では，理論的背景として包括的アプローチを採用し，不登校問題に対して三つの水準を設け，それぞれでアセスメントと介入プログラムを実践する手法をとり，一通りの成果を見た。

上記の研究課題は，児童生徒を対象とした学校適応感を問題とした。これは不登校をはじめとする，学校不適応感を抱く主たる発達段階が思春期であるとする発達理論に基づくものである。

しかし近年，高校生が大学進学後に受ける高等教育とのギャップと適応，また自らの将来展望をもとにしたキャリア形成過程の中で感じる不適応感について，フォローアップの意味でサポートする必要性が指摘されるようになった（溝上,2004）。すでに大学改革の中で，学生のキャリア形成に対するサポートは大学の内外から強く求められており，学生のニーズに対応した授業科目や教育プログラム開発が活発に行われている（田中他,2012）。また，大学生が抱く青年期特有の不安や発達障害あるいは精神的病理への対応機関も拡充が進んでいる。この過渡期の中で，実際の学生は求められる社会人像を形成するために，大学の教育カリキュラムの中で自己を柔軟に変化させていく必要がある。大学は，一般的な社会人基礎力を全学生に保障することと同時に，個別化する学生の特性に対応した支援ができるよう，応用の幅が広い学生対応プログラムを提供することが求められる。さらに，地方国立大学においては，地域の特性を理解し，様々な領域において活躍できる人材の育成が求められている。このような，ローカライズされたニーズにも同時に対応する必要がある。

こうした多方面からの多角的な要望に答えられる大学教育プログラムを考えるにあたって，本研究課題では，申請者がこれまで児童生徒を対象としていた包括的アプローチをより発展させ，大学生に対する包括的サポートプログラムの開発を目的とした。着想は，環境を同じ中心を持つ入れ子構造として捉えるブロンフェンブレナーの生態学的発達モデルに基づいたものである。学生を取り巻く環境の複数のフェイズに対応したキャリア形成過程を，マクロ・ミクロ（中間）・メゾの 3 層に分類し，それぞれの層に対する教育・サポートプログラムの展開を同時並行的に進めていく。

① マクロフェイズ（教育心理学的アプローチ）：社会人基礎力，英語力，学士力，コミュニケーションスキル等，ジェネラルスキルの育成
② メゾフェイズ（社会心理学的アプローチ）：周囲の仲間との関係形成とその中で主観的幸福感，自己効力感を得られる土壌の醸成
③ ミクロフェイズ（臨床心理学的アプローチ）：不適応感や大学生の抑うつ傾向，モラトリアム傾向，アイデンティティクライシスへの対応

本研究の具体的課題としては，各領域の知見を取り入れたアセスメントツールと実践プログラムの開発という 2 方向からアプローチすることとした。対象となる学生の自己認識や志向性を形成する過程，それまでの生育歴や地域性に応えうる多様なプログラム体系を目指すものであった。

２．研究の目的

申請者はこれまで，学校教育における包括的アプローチとして学内の分担研究者とともに，評価尺度や教育プログラム実践の蓄積がある。これらの基礎資料を大学生対象のも

のに書き換えるところから研究を開始し，大学生固有のデータ収集とプログラム実践の段階へと発展させた。その際，既述の通り 3 つの層に対する 2 つのアプローチそれぞれに，次のような下位目標を置いた。

アセスメントツール開発部では，項目反応理論やプログラムマネジメントに基づく，FD（Faculty Development）にも利用できる大学生の大学生活に対する主観的幸福感や，マクロレベルに対する心理教育プログラムの開発を行うこととした。

実践プログラム開発部は，心理的問題を抱える大学生に対する個別および集団的アプローチに基づく心理教育プログラムを開発する。臨床心理的問題を抱えた対象への，人間学的および現象学的アプローチに基づく個別カウンセリングと，青年や地域住民を対象にしたグループカウンセリングの実践と発展を目指した。

３．研究の方法

アセスメントツール開発部ではマクロレベルアプローチの観点に基づいた研究を展開する必要があり，これを目的として大学生のキャリア形成の構成要素に対応する尺度開発を行った。先行研究より，山口県を中心とした約 7000 名の児童生徒を対象とした調査から，児童生徒の学校不適応に関する尺度 Fit が開発され，児童生徒の学校不適応にいたるモデル化が行われている。これを大学生にも適用できるように改訂し，同時に社会人基礎力，学士力等の測定に関する項目を追加して，外的妥当性の検証を行うものとした。

実践プログラム開発部では，ミクロレベルアプローチの観点に基づいた研究を展開した。現行の学校不適応対応に対する心理教育相談やカウンセリング等のプログラムに基づいた，キャリア形成志向型の心理教育支援に関する個別支援プログラムの開発が狙いであった。その際，現行の個別支援プログラムが，本研究課題で設定する現代的課題の解決に対応するものであるかについて，発達心理学，臨床心理学の観点から理論的考証を加える。一方，メゾレベルアプローチとして，ピア・サポートやエンカウンターグループなどの手法を利用し大学生を主体としたコミュニティディヴェロップメントを行うものとした。

４．研究成果

アセスメントツール開発部は研究の第一段階として，これまでの研究蓄積として開発の終わった小中学校における児童生徒の学校適応間尺度を土台に，大学生を対象とした大学適応感尺度の開発を行った。まず，本学の 100 名弱を対象とした予備調査を行い，先行例との尺度構造的一貫性を検証したところ，一貫しない箇所が見受けられたため，再度項目を洗練された第二予備調査の計画立案に入った。

合わせて，基準関連妥当性を検証するための心理尺度を検証している段階で第二予備調査を実施し，本研究課題の最終目標である社会人基礎力等，キャリアカウンセリングに用いることができる尺度の開発を行うことを目指した。最終的に，大学生版 Fit として大学適応感尺度になるよう尺度値を調整し，同時に大学生の考える社会人基礎力，学士力等についての調査から，大学生の主観的幸福感とキャリアプログラムに対する評価の関係について一定の成果を得ることができ，論文として公表した。

実践プログラム開発部については，ピア・サポートによる学生相談グループを運営し，その手法としてこれまで『当事者研究サポート・グループ』を採用してきた。これは精神障害当事者グループ由来の技法であり，適用上難しい場面がみられることもあった。

そこで現在，当事者性を前提としない技法として，新たに『リフレキシブ PCAGIP』

を開発した。また，心理療法の過程の一つであるフォーカシングにおいて，フォーカサー(話し手)とリスナー(聴き手)の相互作用に着目し，その効果測定を行った。具体的には，不安の程度(状態不安・特性不安)を測定する質問紙である STAI を用いて，フォーカシング前後でのフォーカサーおよびリスナーの不安傾向の変化を検討した。また，その評価を目的に，体験過程スケールを用いたプロセス研究も行なった。

学生相談グループの手法は，その後，試行錯誤を繰り返しながら，ベーシック・エンカウンター・グループによるものが中心となっていった。このグループの意義について検討することを目的としたインタビュー調査と，『相互ウォッチワード』という自己理解を目的とした技法によるワークショップを実施した。その効果については，今後検証していく予定である。

一方，実践プログラム開発部のもう一つのアプローチとして，不快な思考の抑制に効果的な手法の開発や，自己の性格特徴の記述によって自己肯定感が高まるかどうかの検証が行われ，いずれも論文や学会発表等で公開された。

本課題を通じて，大学生の適応感尺度や大学生同士のピア・サポート，グループアプローチの開発など様々な成果が得られ，大学教育プログラムに対する自己効力感との関係などが示されるなど一定の成果は得られたが，当初の目的であった教育プログラムの確立にまでは至らなかった。

しかし，本課題を通じて得られた知見は，地方大学におけるキャリア教育のあり方，大学生のメンタルサポートについての基礎的な知見を提供しており，今後，本課題の成果を土台とした研究がさらに発展していくことが期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

1. 小野史典・小杉考司・川崎徳子・大石英史 (2018) 大学におけるキャリア教育プログラムに含めるべき社会人基礎力，山口大学教育学部研究論叢，67，29-32.（査読無）
2. 川崎徳子・小杉考司・小野史典・大石英史・遠藤野ゆり・大塚類（2018）日本人の社会性の発達を支える学校教育の可能性について，山口大学教育学部研究論叢, 67, 39-43. （査読無）
3. 石盛真徳・小杉考司・清水裕士・藤澤隆史・渡邊太・武藤杏里(2017)マルチレベル構造方程式モデリングによる夫婦ペアデータへのアプローチ：中年期の夫婦関係のあり方が夫婦関係満足度，家族の安定性，および主観的幸福感に及ぼす影響，実験社会心理学研究,56,2,153-164. https://doi.org/10.2130/jjesp.si3-2（査読有）
4. 片桐咲恵・西村太志・古谷嘉一朗・相馬敏彦・小杉考司(2017)子育て中の母親はどのようにして対人関係を広げるのか?-「社会的代理人」利用状況の自由記述を用いた探索的研究,山口大学教育学部研究論叢第 3 部,66,83-94. （査読無）
5. 本田志穂・石丸彩香・宇津宮沙紀・山根倫也・小田美優・坂本和久・大江慶寛・小林仁美・有馬多久充・木寺碧・小杉考司(2017)日本人にとって道徳はどのようなものとしてとらえられているか-新しい道徳基盤尺度項目の開発を通じた検証-,山口大学教育学部研究論叢第 3 部,66,95-106. （査読無）
6. 大濱知佳・永野駿太・小野史典 (2017) 思考抑制に与える代替思考の時間的要因の影響，日本感性工学会論文誌，16(2), 253-256. （査読有）
7. 押江隆・藤田洋子・植木美紀・多田佳歩・鞠川由貴・溝口英登・森原梓・山本優子・渡邊弓子(2016)PCAGIP 法にパーソン・センタードな個人スーパービジョンを組み合わせた「リフレキシブ PCAGIP」の開発，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，39，109-118.（査読無）
8. 押江隆・梅野智美(2016)「体験過程流箱庭療法」開発の試み(2)――セラピストが箱庭作品を味わう方法の検討，山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 7, 29-38. （査読無）
9. 小杉考司(2015)学校適応感尺度 FIT の開発,山口大学教育学部研究論叢第 3 部,64,69-82. （査読無）
10. 押江隆・水戸部準・大塚聡介(2015)「体

験過程流箱庭療法」開発の試み，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 39, 109-118. （査読無）

11. 押江隆・足立芙美・三浦啓子・水戸部準(2015)コミュニティプレイセラピー――コミュニティ・アプローチによる新しいプレイセラピー，山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 6, 3-10. （査読無）
12. 押江隆(2015)パーソン・センタード・アプローチとスーパービジョン，山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 6, 27-34. （査読無）

□□□□

〔学会発表〕（計16件）

1. Koji Kosugi, Tokuko Kawasaki, Eiji Oishi, Fuminori Ono, Takashi Oshie, A study of basic skills which need to be included in career education programs at university., Asian Association of Social Psychology, 2017.08.28, Auckland (New Zealand)
2. Tokuko Kawasaki, Koji Kosugi, Fuminori Ono, Eiji Oishi, Noyuri Endo, Rui Otsuka, Concerning the potential for formal education to support the development of social skills in Japanese young people., Asian Association of Social Psychology, 2017.08.27, Auckland (New Zealand)
3. 押江隆・山根倫也・坂本和久・玖村奈美(2017)体験過程スケールによるリフレキシブ PCAGIP のプロセス研究，日本人間性心理学会第 36 回大会(口頭発表)
4. 山根倫也・永野駿太・片桐咲恵・小野史典，言語符号化効果とフォーカシング的態度との関連，九州心理学会第 77 回大会, 2016.12.3，西南学院大学.
5. 山下健一・小野史典，挫折経験による社会的知恵の獲得，九州心理学会第 77 回大会, 2016.12.3，西南学院大学.
6. 山下健一・小野史典，性格特徴の言語化が自己肯定感に与える影響，日本心理学会第 81 回大会, 2016.12.4，久留米大学.
7. 片桐咲恵・西村太志・小杉考司，子育て中の母親のネットワーク構築過程の検討-「社会的代理人」利用に関する自由記述を用いて-，中国四国心理学会, 2016.10.30，東亜大学(山口県下関市)
8. Shiho Honda, Koji E. Kosugi, Sayaka Ishimaru, Saki Utsunomiya, Tomonari Yamane, Kazuhisa Sakamoto, Yoshihiro Ohe, Hitomi Kobayashi, Takumi Arima and Aoi Kidera, Development of a Japanese version of the Moral Foundation Questionnaire, International Congress of Psychology, 2016.7.27., パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）
9. 押江隆(2016)挫折体験の意味づけとフォーカシング的経験および外傷後成長との関連の検討，日本人間性心理学会第 35 回大会
10. 山根倫也・押江隆(2016)児童の教師に対する態度認知と学級集団形成および学校適応感の関連――ロジャーズの 3 条件態度の認知による検討，日本人間性心理学会第 35 回大会
11. 押江隆・藤田洋子(2016)PCAGIP 法にパーソン・センタード・スーパービジョンを組み合わせた「リフレキシブ PCAGIP」の開発，日本心理臨床学会第 35 回大会
12. 石盛真徳・小杉考司・清水裕士・藤澤隆史・渡邊太,家族システムの発達と移行に関する研究(4),日本心理学会,2015.9.22, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)
13. 藤澤隆史・清水裕士・小杉考司・石盛真徳・渡邊太,家族システムの発達と移行に関する研究(5),日本心理学会,2015.9.22, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)
14. 小杉考司・清水裕士・石盛真徳・藤澤隆史・渡邊太,家族システムの発達と移行に関する研究(6),日本心理学会,2015.9.22, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)
15. 清水裕士・石盛真徳・小杉考司・藤澤隆史・渡邊太,家族システムの発達と移行に関する研究(7),日本心理学会,2015.9.22, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)
16. 押江隆・梅野智美(2015)「体験過程流箱庭療法」開発の試み(2)――セラピストが箱庭作品を味わう方法の検討，日本人間性心理学会第 34 回大会

〔図書〕なし
〔その他〕ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
大石　英史（Ohishi Eiji）
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：80223717

(2)研究分担者

川崎 徳子（Kawasaki Tokuko）
山口大学教育学部・准教授
研究者番号：00555708

押江 隆(Oshie Takashi)
山口大学教育学部・准教授
研究者番号：20634752

小杉 考司(Kosugi Koji)
山口大学教育学部・准教授
研究者番号:60452629

小野 史典(Ono Fuminori)
山口大学教育学部・准教授
研究者番号:90549510